

偽物の番

あさじなぎ

R18

偽物の番 上巻



あさじなぎ

イラスト BEEBAR

壺

大学に入って世界が広がった。

それは俺だけじゃなく、高校からの友達である秋谷千早あきたにちはやも同じで、俺以外の人と話すようになったようだ。

入学して数日間は千早といることが多かったが、お互い学部が違うため授業が始まってからは殆ど話す機会がなくなってしまっていた。

俺は俺の、千早は千早の友人ができ、互いに充実した時間を過ごしていると思う。

大学が始まり三週間近くとなった四月十八日月曜日。

駅から大学に行く途中、通りがかかった店先の屋根に藤の枝が絡まり、紫色の雨を降らせているのに気が付いた。少し前まで桜が街を彩っていたけれどあつという間に桜は散り、椿や木蓮などが目に付くようになった。

藤の美しさに見入っていると後ろから、ぼん、と背中を叩かれた。

「おはよう、琳太郎」

振り返ると、パンダの絵が描かれた白いトートバッグを下げた千早が、手を上げて笑っ

ていた。

「千早、おはよ」

「何見てるんだ？ あれ、藤だよな」

千早は俺の視線の先を追い、店へと目を向ける。その店は美容室だろうか。カットがいくらとか窓に書いてあるのが見える。

店の横に植えられた藤の木から伸びた枝は店先の屋根を伝って、花の屋根を作っている。「なんか、お洒落だな、と思つてさ、藤の花の屋根なんて」

「ああ、雨みたいだな」

「だろ？」

「それで見とれていたのか」

そして、千早は俺の方を向き微笑んだ。その笑顔に思わずどきり、としてしまう。

千早は、人を惹きつける魅力を持っている。だから常に人に囲まれているし、交友関係も広い。

「千早のその笑顔、卑怯くせえよ」

思わず視線を反らすと、千早は俺の首筋に触れ、耳元に唇を寄せた。

「そんなに魅力的？」

蟲惑な声に俺の身体の奥底が熱くなるのを感じ、俺は思わず千早から身体を離し、首を横に振りながら言った。

「な、何ふざけてんだよお前！」

「ははは。ほら最近、琳太郎と話してなかった気がするからちよつと悪戯したくなって」
確かにそうかもしれないけれど。

大学が始まってすぐは、千早としかつるんでいなかったけどそもそも互いに学部が違うため、講義も被らない。

だから顔を合わせても挨拶をするくらいになり、最近は同じ学部の友人とばかりつるんでいた。

こんな風に朝会うのは、初めてじゃないだろうか？

「悪戯とかすんなよ、つたく。そういうのは恋人にだけやれよ」

「俺に恋人なんていないの知ってて言ってるよね？」

千早は見た目が良い。少し癖のある茶色に染めた髪。二重の瞳。百七十五センチの俺より五センチほど背が高く、筋肉質だし、顔立ちもいいし育ちもいい。

親はどこかの企業の重役だとか聞いた。性格も問題ないと思うけど、恋人を作らない。前、理由を聞いたら、

「運命の相手を探してるから」

と、笑って言っていた。

「そんなやついるのかよ？」　と思つたし、千早らしくない言葉で意外だったからよく覚え
ている。

「ああ、運命の人だっけ？　お前、見た目に似合わずドリーミーだよな」

「俺たちにとっては普通の事だよ。俺たちは、本能で探してるんだ。運命の番^がってやつを。

まあ、俺も信じてるわけじゃないけど、本当にそう言う相手が現れたらどれだけ感情を動
かされるのか、気になるんだよな」

俺たち。運命の番。

その言葉の意味が分からず、でもどこかで聞いたことがあるような気がして俺は記憶を
たどる。

パース物と呼ばれるドラマや漫画などがある。

男と女以外の第二の性、アルファ、ベータ、オメガという性があり、多くの人間は一般^ペ人^タ
だけれどパーセント以下の確率でアルファとオメガが存在すると言う。

アルファは優秀で、眉目秀麗、才色兼備だとか。そしてそのアルファを産むことができ
るのはオメガだけらしい。

そんなパース性を強く前面に出した創作物をパース物と呼んでいる。

そのドラマの中で、アルファとオメガには運命の番がいて、お互いに惹かれあい絶対に離れられない結びつきがあるとかいう話があったような。

俺はベータだからよくわからないし、っていうか皆わざわざパース性を口にしないから周りにオメガがいるのかアルファがいるのかも知らない。

確率的には学年にひとりふたり、いてもおかしくないけど。

中高生の時は、誰がアルファだとかオメガだとか噂したものだけど、そこまで深く考えたことはない。

「つて……お前まさか……」

疑問を口にしようとした時。

「結城、おはよう。何騒いでるの、朝から」

笑いを含んだ高めの男の声がして、俺ははっとして声の方を見た。

癖のある茶髪に、二重の大きな瞳。俺よりも十センチ近く背が低い。

みやたらん
宮田藍。俺と同じゼミの友人だった。

彼は俺に歩み寄ると不思議そうな顔をして首を傾げた。

「どうかしたの？ 顔が赤いけど」

「あ、あ、あいつがふざけるから」

そう言った俺の声はなぜか上ずっていた。

宮田は俺が指差す方を向き、千早を見る。

千早は目を大きく見開き、宮田を見つめていた。なんだあいつ、何であんな驚いた顔をしているんだ、珍しい。

宮田はさっとこちらを見ると、手を上げ、

「僕、先に行ってるから！」

と焦るような声で言い、早足で去って行く。

なんだあれ？

俺はその背中を見送り首を傾げた。宮田の背中はずぐに、通行人の中に埋もれてしまう。

「琳太郎……」

呆然とした千早の声に、俺は不思議に思いながら振り返った。

彼は宮田が消えた方向を見つめたまま、ふらふらとこちらに歩み寄ってくる。

「お前、どうしたんだ？」

「今の、誰だ？」

俺の方に一切視線を向けず、千早は言った。

「え？ 今のは……同じゼミの宮田藍だけだ」

「宮田、藍……」

自分に言い聞かせるかのように、千早は宮田の名前を繰り返す。

「見つけた」

宮田が去って行った方を見つめたまま、千早は呟いた。

*

一限目の必修科目。

広い講義室の中央で宮田の背中を見つけ、俺はそこに近づいて行く。

「宮田」

スマホを見ていた宮田はびくん、と身体を震わせたあと、驚いた顔をして隣に腰かける俺を見た。

「あ……ああ、なんだ、結城か」

なぜかホツとしたような声で言い、スマホをバッグの中にする。

「お前さっき慌ててたけど、何かあった？」

言いながら俺はシヨルダーバッグをおろし、講義に必要なものを取り出す。

「え？ あ……ちよっとね……」

気まずそうに呟き、宮田は正面を見つめた。

宮田といい千早といい、どうしたんだろうか？

「ねえ、結城」

「何？」

宮田はこちらを向き、深刻そうな顔で言った。

「あのさ……朝の人、誰？」

「あれは秋谷千早。高校からの同級生だけど……何かあった？」

俺が問うと、宮田は苦しげな顔をして視線を下げた。

「いや、その……あの人……そうか。結城の友達なんだね」

「ああそうだけど、大丈夫か？ 顔、真っ青だけど」

「……結城にはわからないよ」

深刻そうな声で言い、宮田は正面を向く。何があったんだ、おい。

訳が分からないまま講義が始まってしまい、九十分の間、俺はもやもやしたまま過ごしていた。

一限目が終わり、休憩時間に何かあったのか宮田に聞きたかったが、雑談で誤魔化されてしまい結局何も聞けず、お昼休みを迎えてしまった。

食堂は、たくさんの学生であふれていた。

天気がいいので中庭でコンビニなどのパンを食べる学生の姿も見える。

宮田は今日、お弁当だと言うので先に席の確保を頼み俺は順番待ちの列に並ぶことにした。

唐揚げ定食を買い、盆を持って宮田を捜す。

窓際の席に宮田がいるのを見つけたが、その彼に話しかけている人物に俺は目を疑った。

千早だ。

千早は何か宮田に言い、宮田はそれに首を振り、下に視線を向けている。

何なんだ、あれ？

「千早！」

ふたりに近づきながら俺が言うと、千早は俺の方を見つめ、一瞬目を細めた。

……って、今晚まなかったか？

「どうしたんだよ、千早。宮田になんか用？」

「ああ、そうなんだけど……また後にするよ、じゃあね」

千早は微笑みそして、俺と宮田に手を振り、去って行った。
なんだあいつ？

不思議に思いながら、俺は宮田の前に盆を置き椅子に腰かけた。

宮田の顔を見るとなんだか青白い。

「お前、千早になんか言われた？」

そう問いかけると、宮田はびくん、と身体を震わせ顔を上げて俺を見た。
目を大きく見開き、

「ううん、なんでもないよ」

と、上ずった声で答える。

なんでもないはないだろう。宮田にしても千早にしてもなんか変だ。

何があったんだ？ あとで千早に聞かか。

「そんなことより、ほら、食べよ！」

と言い、宮田はお弁当箱を開けた。

お昼の後、宮田にわからないように俺は千早にメッセイジを送った。

『千早、宮田と何話してたの？』

すぐ返事はないだろうとスマホをジューパンのポケットにしまおうとすると、ふるふる

震え、メッセージの着信を告げる。

俺はすぐにロックを解除して、メッセージを確認した。

『朝話しただろ？ 運命の番の話。いたんだよ、運命が』

どういう意味なのか考え、疑惑が確信に変わる。

『って、お前、もしかして、アルファだったの?!』

そうメッセージを送ると、驚いた顔をした猫のスタンプが返って来る。

『嘘、お前、知らなかったの?』

『知らねーよ。全然しらねーって』

『高校の同期、たぶんほとんど知ってたぞ？ 別に俺、隠してなかったし』

なんだって？

一学年二百人以上いたはず。

その中で俺だけが知らなかったかもしれない……？ ちょっとそれ、シヨックなんだけど。

『まあいいや、お前夕方暇？ バイトとかなないなら会って話そう』

そして五時前に食堂で待ち合わせる約束をして、メッセージのやり取りは終わった。

午後の講義中、隣に座る宮田をちらり、と見る。

彼はシャーペンをくるくると回し、心ここにあらず、という感じた。

千早がアルファで、宮田を運命の番だとか言いだす、ってことは……

宮田はオメガなのだろうか？

アルファもオメガも、見た目は普通だって話だ。

ただ、オメガは数か月に一度発情期があり、一週間やりたくて仕方がなくなる、って聞くけれど。

俺、宮田と出会ってまだ三週間しか経ってねえしな。

パーソ性はデリケートな話だから、年齢を聞く並に失礼なものなので聞けない。

宮田がオメガでも、俺にとっては大事な友達だから態度が変わるとかねえけど……でも、もし本当に千早の運命の番だしたら。なんだろう、モヤモヤする。

千早は友達だ。高校からの友達なのに……この胸を焼く、訳のわからない感情の正体がよくわからない。

最近距離できるとはいえ、いやまあ、それはそれで寂しくはあったけど、お互いに世

界があるからそんなの仕方ねえしな……
にしても、運命の相手が現れたって割には、宮田は嬉しそうじゃねえな。ドラマなんか

だと、盛り上がるところなのに超暗い。

なんて言うか、苦しそうだ。そういうもんなのかな。

三限目が終わり、荷物をシヨルダーバッグにしまっているとき。

「ねえ、結城」

深刻そうな声で、宮田は話しかけてきた。

「え、何」

「結城は、運命って信じる？」

「……へ？」

その言葉に、思わず心臓が跳ね上がる。

ってことは、宮田も千早が運命の相手だと、感じているってこと……だよな。

「運命って……いや、考えたことねーけど」

実際考えたことがなく、だから嘘をつくつもりもないので俺は素直に答える。

すると宮田は頷いて、哀しげな顔をして言った。

「そうだよね、考えたことないよね。僕も、そんなのいるわけがないって思ってたんだ。心が揺れ動かされるけどでも、僕は静かに過ごしたいからだから僕、アルファとは関わりたくないんだ」

アルファとは関わりたくない。

それってつまり、千早と関わりたくないってことだよな。

話しをしている間に講義室からは学生たちがいなくなり、いるのは俺たちだけとなる。

「静かに過ごしたいってどういうこと」

「大学で、青春楽しみたいんだ。高校で、色々あったから」

そして、宮田は悲しげな顔になる。

夢ってそんなこと？ もっと、どこで働きたいとか、何をしたいとかそう言う事かと思っ
たら。

そんなことなの？

夢と呼ぶにはささやかすぎないだろうか？ つうか高校で何があったんだよ。

さすがに聞くのはためられる。だって、普通を求めるようになる出来事って……相当
重そうだ。

「夢を叶えるまでは、受け入れたくないんだ。その為に僕は、両親の反対押し切って、大学
に入ったから。まあ、時間稼ぎなんだけどね」

「時間稼ぎってどういう意味だよ？」

「あれ、知らない？ オメガは、結婚年齢早いんだよ。まあ、そうだよな。発情期になると

その辺にいる人、構わず誘惑しちゃうことあるから。相手が決まるとそう言う事なくなつて、発情期をコントロールできるようになるんだよ。だから周りも早く結婚させようとするんだ」

知らなかったそんなの。

そもそも周りにいると思っていなかった。

俺は何を言っているかわからず、押し黙ってしまった。

「まあ知らないよね。僕もこんなだから何人か知ってるけど、身近にいるわけじゃないし。だから驚いたよ。しかも結城の友達だなんて」

「千早が、その……宮田の事、運命の番だと言ってたけど……」

言いにくい、と思いつつも俺は千早から聞いたことを尋ねると、宮田は頷いて言った。「そうだよ。だから食堂で口説かれたんだ」

あ、やっぱそうなんだ。

千早が口説くとかあるんだ……

「でもそれでお前、なんて言ったんだ？」

「え？ 今はそういうつもりはないって。そうしたら驚いてたよ。あれでしょ、運命の番に断られるなんて思ってもみななかったんじゃないかな」

「……それって、拒めるもんなの？」

俺の問いに、宮田は首を傾げた。

「どうなんだろう？ 逆らえないって言うけど、全力で拒否したよね」

ドラマなんかだと逆らえないとか言うらしいけど。

実際はどうかなんて言う話は出てこなかったな。

まあ、ちゃんと調べれば研究資料とかに当たるかもしれないけれど。

「もしかしたら僕が特殊なのかもしれないけれどでも、アルファが本気になったらひとまわりもないかもしれないから、僕としては彼に近づきたくないかな」

と言って、宮田は苦笑した。

三限目の後は予定がなく、俺は宮田と別れ図書室で時間を潰すことにした。

千早はたぶん、四限まで授業があるんだろう。

約束の時間まで、俺はアルファだとかオメガだとかについて色々調べていた。

色々調べていくうちに、オメガがどうやって妊娠するのかとか、セックスのしかたとか出てきて、俺は思わずページを閉じた。

いや、興味がないわけじゃないけれど。

なんかこう、生々しくって見てられなかった。

そうだよな……アルファもオメガも男だったら……そうだよな……そうなるんだよな……
わかつてはいたけれど衝撃的だった。

千早がアルファで、宮田がオメガ。しかもふたりは運命の番。

ネットによると、運命の番は本能的なもので逆らせるものではないらしい。

ってことは、宮田は相当な精神力で千早を拒否した、ってことか？

番が決まれば辛い発情期を過ごさなくて済むらしいし、悪いことじゃなさそうなのにな
んで宮田は番を嫌がるんだろう？

まあそんなの、俺が気にすることじゃねえか……

図書室で時間を過ごし、五時近くになって俺は図書室を出て食堂へと向かった。

この時間ともなると、構内に人影は少ない。

食堂へ着くと、千早が窓際の椅子に腰かけ、中庭へと視線を向けていた。

外は徐々に日が傾き始め、あと一時間もすれば辺りを闇が包むだろう。

千早はうろんげな空気を纏い、普段とは別人のようだ。

あいつ、あんな顔するっけ？ 高校から知ってるけど、あんな顔知らねえぞ。

あいつの前にはコーヒーのペットボトルが置かれている。

俺が歩み寄ると、千早は気が付きこちらを向いてにこっと笑った。

「琳太郎」

「わりの、待たせた？」

「いや、ちよつと考え事してたから大丈夫」

俺は千早の向かい側に腰かけてそして、昼の事を尋ねた。

「で、宮田が運命の相手ってまじなん？」

「あゝ」

千早は頷き、そしてペットボトルを掴んだ。

「まさか本当にいるなんて思わなかった」

そう呟き、ペットボトルのふたを開けそれに口をつける。

まあ、確かに朝、運命なんてないかもしれないけどみたいなこと、言ってたしなあ……

本能的なものだから逆らえないとか、相手が拒否してる状況だと厄介だな。

「でも、彼には拒絶されたよ」

千早が深刻そうな声で言う。うわ、こいつ、こんな声出すんだ。

「まさか拒否られるとか思わなかった。今まで口説いて落とせなかったことなんてないのに」

ちよつと今、すげーこと言った？

「そんな話初耳だぞ」

「お前が興味なかっただけだろ」

そう言われて、俺は高校の時をふと思い返す。

興味がなかったというか……そこまで気にしてなかったと言うか。

恋の話くらいはしていたと思うんだけどな。

「俺だって十八だぞ。そういうことくらいあったよ。まあ、コレジャナイ感が強くて長く続いたことないけど」

コレジャナイ感。

そうか、運命の相手じゃないから……ってことか？ それってめちゃくちゃ大変じゃね？
「俺は、本能的に運命の番の存在を信じていたんだろうな。だから誰と付き合っても駄目だった。それで今朝、やっと見つけたと思ったのに……」

ぐしゃり、と、千早は空になったベツトボトルを片手で握りつぶす。

こいつ大丈夫か？　なんでこんな追い詰められたような顔してるんだ？

千早は顔を上げ、大きく目を見開いて声を上げた。

「運命の相手なのに、なのに拒絶するとか、あり得ると思うか？　思わないだろ？」

同意を求められても、俺は頷くことも否定することもできなかった。

だが、俺の反応など気にせず、千早はしゃべり続ける。

「昼休みからずっと考えていたよ。何で拒絶されるのか。運命の相手だってこと、彼もわかってはいるはずなのになぜって。『今はまだ、そういう相手を持つつもりはない』って、はっきりと言われたよ。夢でも見てるのかと思っただ」

千早は首を振り、また視線を下へと向ける。

「宮田が嫌がっててお前……それでもあいつのこと、欲しいって思うのか？」

そう問いかけると、千早はぱっと、顔を上げ、大きく頷いた。

「ああ、今すぐにでも手に入れて閉じ込めてやりたい。ぐちゃぐちゃにして、喘ぐ姿を見たい」

生々しい言葉に、俺は顔が真っ赤になるのを感じた。

え、千早がこんなこと言うの、まじ？ こいつこんなこと言うやつじゃないよな？

変わり過ぎて、俺は驚くを通り越して困惑していた。

本能が求める運命の相手の存在って、こんなにも狂わせるのか？

……大丈夫か、これ。襲うとか、しねえだらうな。

そこまで馬鹿じゃねえと思いたいけど……

俺は不安を抱きつつ、千早に言った。

「お前それで、その……どうするの、宮田の事」

「……幸い学部も違うし、顔を合わせることは滅多にないだろうから……大丈夫だよ。ごめん、変なこと言ってる」

まあ確かに。入学して三週間、ふたりは顔を合わせてないんだもんな。
でも。

お互いの存在を知ってしまっただ今、避けきることができんだろうか？

宮田は大丈夫だろう。たぶん。

でも。

千早は……なんだかやばそうな気がする。

俺は、頭を抱える千早の手に触れ、

「なんか駄目そうなら言えよ。まあ、俺じゃあ何の役にも立たねえだろうけど、話し相手位はできるし」

そんなの慰めでしかないことはわかっているけれど。でもこんなことしか言えなくて。

千早は顔を上げず、

「ありがとう」

とだけ言った。

*

千早の事が気になって仕方がない俺は、その夜千早に連絡を取ることにした。でも何を言っているかわからず悩んだ結果、俺と一緒に大学行かないかと誘うことにした。

正直他に何にも思いつかなかったけど。

大学生にもなってきたがどうかとは思ったものの、千早はのってきた。

翌日、千早と待ち合わせた駅にあるコンビニにいます、千早が近づいてくるのが見えた。黒と灰色のTシャツに、黒いパーカーを羽織った千早は、俺に気が付くと手を振ってき

た。
「おはよう、千早」

「ああ、おはよう。珍しいな、一緒に登校しようなんて」

珍しいと言うか、初めてだと思っ

それだけ千早が心配だったんだけど、心配し過ぎかな？

見た感じ、千早は普通そうだ。

「いやあ気になってさ……でも、大丈夫そうならよかった」

そう答え、俺は笑いかける。本当に大丈夫なら、いいんだけど。

昨日のあの様子からすると、かなりきついんじゃないだろうか、って思う。

俺は千早のすべてを知っているわけじゃない……

こういう時に千早、隠すだろうか？　そこまではわかんねえな。

俺は千早の顔を見る。辛そうな顔はしてないし、クマができてるわけでもない。

普段と変わらない顔で、目の前にいる。

その時、千早が目を反らし何か呟いた気がした。でもなんて呟いたのかわからず俺は彼を見た。俯いた顔は、苦しげに見える。

……大丈夫じゃ、ないんだらうか？　千早、苦しんでる？　そう思うと心が痛む。

俺にできることなんて何もない。そんなことわかってるけれど。

宮田が拒絶しなければ、千早は苦しまなくて済むのに。でも……宮田は嫌がっているしな。

何が正しいのか、俺には判断できない。

どうしたら、ふたりが苦しまなくて済むんだらうか？

その答えを俺は見いだせないでいた。

一緒に歩きながら、俺は千早の顔を見る。

高校の時、わりと女子には人気あったっけ？ 顔良いし、金持ちだし。でも浮いた話は

ほとんど聞いたことがない。

運命の番か……

……俺がオメガだったら千早はこんなに苦しまなくて済んだのかな。

その想いに俺はハツとして首を振る。何考えてんだ、俺。千早は友達で、それ以上でも

それ以下でもないじゃねえか。

大学に着き、千早と別れてひとり校舎へと歩き出す。

一限目の講義が行われる大きな講義室に入り、俺は宮田の姿を探した。

中央の端の方にその姿を見つけ、俺はそちらに向かって歩いて行く。

そして宮田の隣の席に座った。

「おはよ、宮田」

「あ、うん、おはよう」

宮田はぎこちなく笑いそして、頬杖ついて俯いてしまう。

千早も、宮田も様子が変だ。

……でも、俺が口出すことじゃねえしな。

人生を左右するようなことだし、下手なことは言えない。

宮田は、高校の時に色々あったって言ってたけど、何があったんだろ？

その後、休み時間や昼休みなど、宮田と話したけれど特に変わった様子は見られなかった。

ただ、朝みたいになにか思いつめたような顔をすることはあつたけど。

なにか相談してやることもないし、呟くこともなかった。

そんな顔をするなら、千早を受け入れたらいいのに、と無責任な他人である俺は思うけれど、そんなの口出しできねえし。

でも人が苦しむ姿ってあんまり見ていたくもなかった。

*

それから一週間後。

朝、駅に着き大学へと向かう道すがら、見覚えのある背中を見つけた。

「千早！」

名前を呼び、俺はその背中に小走りに走り寄る。

千早はこちらを振り返りそして、力なく笑い言った。

「ああ、琳太郎」

元気ねえな。

「お前、やっぱ変じやね？」

そう俺が言うと、千早は首を横に振る。

「別に」

と言い、千早は前を向く。何か思いつめたような顔をして。

大丈夫そうには見えねえんだけど、千早は認めたがらない。なんでそんな頑ななんだこいつ。

「おい、千早。千早ってば」

声をかけると、千早ははっとしたような顔をして俺を見て、瞬きを繰り返した。

「琳太郎……？」

「なんで疑問形？ お前絶対におかしいよ」

すると、千早は首を振り、

「お前には関係ないことだ」

などと言いだす。

関係ない。確かに関係ないけどさ。たまらず俺は、千早の肩を掴んだ。

「関係ないって、それでも俺は、お前の事心配だって思うし、なんかできることあればしたいって思うんだよ」

そんなの、俺のエゴだろうけど。

でも千早のことが心配だし、俺はなんかしたいって思うんだ。

その時、千早がきよろきよろと辺りを見回し始めた。目を見開き、誰かを探しているみたいだ。

必死な顔が、徐々に暗くなっていく。

「千早？」

名前を呼ぶけど、反応がない。どうしたんだよ、千早。

俺も辺りを見回すけれど特に変わった様子はない。

……宮田が、いたのかな？ さっきの顔、この間、宮田を見たときの顔に似ていたし。そう思うと心が痛い。

「ちよ……千早、大丈夫かお前？」

俺はもう一度千早を呼ぶ。

けれど千早は俺を見ていない。目の前にいるのに見えていないみたいだ。

「千早？ おい、千早ってば」

俺は千早の肩を掴み、顔を覗き込んだ。

すると千早は俺の方を見て何度も瞬きを繰り返す。

そして首を振り、肩に置いた俺の腕に手を添えて俯いてしまった。

「大丈夫だ。お前が、気にすることじゃない」

「どこがだよ？ 超苦しそうじゃねえか」

千早は明らかに暗い顔をしている。

なんでこいつは、こんなに苦しんでいるんだ？

「……お前なら、良かったのにな」

「え？ 何が」

意味が分からず俺は首を傾げた。千早は俯いたまま動かない。

俺が、何ならよかったんだよ？

「琳太郎」

「何だよ」

「俺は、大丈夫だから」

「信じられるかよ」

そんなの信じられるわけがない。

千早は顔を上げて俺の顔を見つめる。その表情はどこか悲しげだった。

「なあ、琳太郎。お前、俺と寝てみる？」

砕けた口調で言われ、俺は何を言われたのか認識するのに時間がかかる。

寝る……寝るって何？

俺はぼっと、千早から手を離しそして、首を勢いよく横に振る。

「な、な、な、何言ってるんだよ。お前、怒るぞ？」

「ははは、冗談だよ。お前がもし番だったら、そういうこともあったのかなと思って」

番って……そう言うことだよな、恋人とか、愛人とかじゃなくて？ 番……って、え？

「つ、番って……俺はお前の友達で番じゃねえし。っていうか何言ってるんだよ全く。俺、お前の事心配してるんだって」

「だから、お前が番の身代わりになれば俺の苦しみは解決するんだよ。たぶん」

本気なのか冗談なのかよくわからないことを言い、千早は笑ってる。

何だよ身代わりって……訳分かんねえよ。

「身代わりって……そんなのできるわけねえだろうが」

「冗談だよ。お前は俺の物だけど、番じゃないからな」

「物ってなんだよ、物って」

物扱いは酷くねえか？俺、千早の事心配してるってのに。

「大事な友達だよ。ほら、行こうぜ。講義に間に合わなくなる」

大事な友達。

俺は千早の腕を掴みそして、声を上げた。

「そうだよ、俺は友達。今度、物とか言ったら俺、口きくのやめるからな」

自分でも子供じみた発言だと思っけれど、今、俺は怒ってる。

千早はちよっと驚いた顔をした後、俺の頭に手を置いて言った。

「わかったから。こんな往来でそんなことやってると目立つぜ？」

言われて俺ははっとする。ここは商店街のと真ん中だ。

千早から手を離し辺りを見回すと、女子学生と目が合う。

やべえ俺。朝からこんなところで何やってんだ。

俺は真っ赤になって俯いたあと、首を振り、千早の腕を掴んで歩き出した。

*

それからまた、三週間ほどが過ぎた。

五月も半ばになり、大学生活にもだいふ慣れた。

あれから宮田と千早は接触していない……と思う。

ふたりとも互いの話をしてこないし、俺は俺でふたりと話すとき、互いの話題を出さない様にしていた。

大学に入り色んな人間関係が広がり楽しいと思っていたはずなのに、こんな弊害が出てくるとは思わなかった。

アルファとかオメガとか。

俺は正直気にして生きてこなかったが、周りでその手のドラマの話をしているとなぜだかドキドキするようになっていた。

「昨日のドラマ超最高だったー！」

という、パスもののドラマや漫画などの話が、食堂や講義室などで聞かえてくる。

女性たちは特に、パスものが好きらしく話題にしていることが多かった。アルファがどうかオメガがどうか。個人の話だと全く話題に上らないのに、創作物だと言いたい

放題だ。

アルファの誰々はオメガを監禁してとか物騒な言葉が飛び出す。

今の俺にはなんだか生々して、近くでその話が始まると離れるようになってしまった。
金曜日のお昼休みの後。

講義室に向かう途中、宮田は慌てた様子で、

「先に行つてて」

と言ひ、トイレへと走つて行つた。

腹でも痛いんだらうか？ 不思議に思いつつ講義室に向かい、すみっこに席を確保する。
いつまでたつても宮田は来ず、授業が始まるまであと五分になつた頃。

メッセージを送つても既読にならず心配になつて、俺は様子を見に行くことにした。

少しざわつく構内を歩き、宮田が入つて行つたトイレへと向かう。

中に入ると、人の気配はなかつた。

あれ？ 確かにここに入つたと思ふんだけど……

あいつ、どこに行つたんだらう？

疑問に思ひながら、俺はトイレを出て辺りを見回す。三限目がもうすぐ始まる。

どうする？

スマホを開くが、まだ既読はついていない。

どこにいったんだよあいつ……

見つからないし仕方なく講義室に戻ろうとしたとき、がたん、と、音が聞こえた。この時間は講義が入っていないはずの小さな教室の前。

「だから、そんなつもりはないって言ったじゃないですか」

聞こえてきたのは、宮田の声だった。

「俺にはわかるんだよ。君、発情期だろう？ その匂いが……俺を狂わせる」

切羽詰ったようなこの声……千早？

え、千早と宮田が一緒にいる？

なんで？

考えるよりも先に身体が動き、俺は声がる教室の扉を勢いよく開いた。

すると、宮田の腕を掴む千早の姿が目に入る。

ふたりは驚いた顔で俺を見て、

「結城……」

「琳太郎」

と、同時に俺の名を口にした。

「千早、何してんだよ」

教室の扉を閉め俺は彼らに歩み寄り、宮田の腕を掴む千早の腕を掴んだ。

「琳太郎」

「お前、そんなことしたくないんじゃないんじやなかったのか？ 何考えてんだよ」

「わかってるんだよ、そんなことは！」

そう声を上げ、千早は宮田から手を離しそして、俺の方を向いた。

「でも匂いがするんだよ。発情期の、オメガの匂いが……」

「結城……俺、発情期始まったみたいでそれで、薬飲んで講義室行こうとしたら……その……」
といい、宮田は押し黙って下を向いてしまう。

そういえば、アルファもオメガも、互いを誘う匂いを発するとか書いてあったっけ？

発情期のオメガは強い匂いを発し、アルファだけじゃなく、敏感なベータを誘惑してしまふことがあるとかネットに書いてあったな。

発情期を押さえる為の薬があるらしく、それを飲めば酷い時以外は普通に過ごせる、とも書いてあった。

「僕だって別に……誘いたいわけじゃないよ」

「俺も襲うつもりなんてなかったよ」

ふたりとも、苦しげな声で言う。

「と、とりあえずここは任せて、宮田、先行ってろよ。今なら講義にギリ間に合うだろ？」

「え、でも……」

と言った後、宮田は俺と千早を見比べ、

「ごめん」

と言い、慌ただしくその場を後にした。

その背を、無意識なのか、千早が視線で追っていく。

「おい、千早、大丈夫か？」

「大丈夫じゃねえよ」

その声に含まれた感情の名前は何だろう……敵意？ 憎しみ？

もしかして、怒ってる？

千早は首を振り、俺の方に視線を向けた。

その目に、怒りの色が見えるのは気のせいじゃないだろう。

怖い。千早が、知らない生き物のような気がして。

「なあ琳太郎。俺だってこんなことしたくないんだよ。なのに……なのに本能があいつを求めらんだ。あいつを手にいれろって。今すぐ閉じ込めて、うなじを噛んで番にしろと。裸

にして、抱き潰せって訴えるんだ」

千早の苦しげな声に、俺の心に痛みが走る。

止めない方がよかったのか？

いや、でも。

止めなかったらこいつ、ここで宮田になにしたかわかんねーしな。

「夜、ひとりになると思い出すんだ。あいつの事を。抱きたくて、犯したくて。でもそんなことやったらまずいことくらい俺だってわかっている。だけど俺……もう、どうかかなりそうなんだよ、琳太郎」

鬼気迫る顔で、千早は言った。こんな顔、こいつするんだ。

俺、何ができる？ 千早に何ができるんだろう。

ぐるぐると考えるけれど、答えなんて出ない。

宮田が拒絶しなければ。

千早が宮田に出会わなければ。

こんな苦しみを抱かなくて済んだだろうに。運命ならなぜ、神様はこんなことするんだろう。ほんとうにこれが運命なら、もっと早く千早と宮田は出会うべきだろうし、そもそも宮田は拒絶なんてしないだろうに。

なんで千早は、苦しまなくちやいけないんだ？

千早は俯いたまま呻くように言った。

「今すぐここで犯したかった。裸にして、泣かせて……でも、お前が止めに来た」

「……そうならなくて、良かったと思ってるよ」

絞り出すような声で俺が言うと、千早は俺の顔を睨み付けた。

その目に俺は思わず後ずさる。

怖い。千早の目が、千早の顔が。

こんな所でレイブはさすがにまずいだろうに。いや、レイブ自体まずいと思うけど。

「良かった？ 俺はよくないよ。この感情をどうしたらいい？ なあ、琳太郎」

「感情って……どういふことだよ？」

「抱きたいって言う感情だよ」

それは……俺にはどうすることもできない感情だった。

でも謝ることもできないし、つていうか止めたことに後悔はない。

以前、千早が言ったように、俺が番だったらよかったのにな。

そうだったら俺は……千早を拒絶しないし、こんなに苦しめることもしないのに。

千早は下を俯き、

「ああ、その手があるか」

と、小さく呟いた。

そして、ゆっくりと顔を上げたとき、なぜか彼は、不気味に笑っていた。

「お前が代わりになればいい」

「……え？」

代わりって何？

訳が分からず困惑していると、千早は俺に顔を近づけてきて言った。

「お前この間言ったよな？ 駄目そうなら言えって。なあ、琳太郎」

「た、た、確かに言ったけど。え？ どういうこと？」

事態が呑み込めず、俺は困惑するばかりだった。

「なあ琳太郎。お前が彼の代わりになればよ。卒業するまで。そうすれば少なくとも性欲は満たされるからな」

ちよつと待て、今とんでもねえこと言いませんでした？

それってもしかして……

「おい、それはちよつとどうかと思うぞ？ それって俺がお前に……」

そこまで言って、俺は息をのむ。

千早の目が、肉食獣のようなぎらついたような目に見えたからだ。
怖い。

俺、喰われる？

「いいよな、琳太郎。お前が、止めたんだから」

拒絶は許さない。

そんな声音で千早は言い、俺はその威圧感に圧倒され、何も言えなくなってしまった。

その後。

強引に俺は千早が乗って来た車に連れ込まれてしまった。

っていうか、いつの間に車通学になったんだよこいつ。

真新しいセダンタイプの青い車に乗せられ、新車の匂いに気持ち悪さを感じる。

すぐに車は発進し、十分少々で、千早がひとり暮らしをしているマンションに着く。

帰る事もできず、俺は千早に手を引かれるまま、彼の部屋へと連れて行かれた。

寝室に連れ込まれ、ベッドを見て俺は事態の重さを実感する。

このまま俺、ここでこいつに抱かれる……？

ベッド大きいな。ダブルかな？

「琳太郎。脱げよ」

反論は許さない。

そんな声音で千早に言われ、俺は仕方なくシオルダーバツグを床に置き、ゆっくりと服を脱いだ。

パーカー、Tシャツ、ジーパン。

下着まで脱ぐ勇氣はなかったが、千早に促され、俺は覚悟を決めて全裸になる。そしてベッドに押し倒されたかと思うと、顔が近づき唇が触れた。

舌が唇をこじ開け、俺の口の中に入ってくる。

いきなりディーブキスカよ……！！

千早は俺の口の中を舐め、舌を絡め取る。

唾液が混ざる音がダイレクトに聞こえ、俺は本当にキスされていることを実感する。

これ、夢じゃねえの？

千早は唇を一度離し、すぐにまた口づけてきた。

口の中を舌で蹂躪されくらぐらし始めた頃、唇が離れ、俺は大きく息をついた。

「キスだけでそんな顔するのかよ、お前？」

笑いを含んだ声で言い、千早は俺の胸を撫でる。

「やっぱ小さいな、乳首。卒業までに、どれくらい大きくなるか楽しみだな、琳太郎？」

その言葉に恐怖を覚えるが、抗議する余裕などすでになくなっていった。

千早の指が俺の乳首を、腹を撫で、すぐにペニスへと触れる。

まだ萎えているそれは、人に触られただけで、びくん、と震えたような気がした。

「今すぐ突っ込んでやりたいけど、さすがに中、綺麗にしないとなあ。でもその前に、気持ちよくしてやるよ、琳太郎？」

妖しく笑い、千早は俺のペニスを扱き始めた。

もちろんそんな所を触られた経験などない俺は、すぐに勃起し、先走りを溢れさせる。

「あはは、琳太郎、もう感じてんの？」

俺のペニスを扱きながら千早は言い、俺の耳をペロリ、と舐めた。

「ああ……!!」

「はは、良い声。もっと啼けよ、琳太郎。ますますぶち込んでやりたいの、我慢してやってるんだからさ」

「あ、ち、千早……耳、やめ……」

耳を舐められるたびに、ぞわぞわとした感覚が背中を走っていく。

「へえ、ここ弱いんだな」

そう囁き、千早は俺の耳を舐め回す。

「い、や……ああ！」

腰が跳ね、千早に扱かれたベニスから精液が溢れだす。

どうやら軽くイってしまっただらしい。

やべえ。

耳舐められて感じるとか、俺、どうかしてないか？

「あー、早くいれたい。でも中、綺麗にしないとだよなあ？ 琳太郎、覚悟しとけよ？」

千早は俺の顔を見つめ、にやりと笑って見せた。

そして俺は風呂場に連れて行かれて、腹の中を綺麗にされたあと、ふらふらでベッドに戻りぐったりと横たわった。

綺麗にするってそう言う意味かよ……

そうだよな。っていうか、オメガの場合はどうなってるんだ……

なんてことを考えていると、千早の声が降ってきた。

「ほら、琳太郎、休んでる暇ねーぞ。うつぶせのまま、尻あげるよ」

俺は言われるまま、うつ伏せで尻だけあげる。

恥ずかしい恰好なのに、何で俺、言うこと聞いているんだ？

千早の声には、人を従わせる力があるように思う。

千早は何かの液体と共に、俺の尻に指を突っ込んだ。

「ひっ……！！」

さっき、腹の中を綺麗にするために器具を突っ込まれたとはいえ、異物感に慣れるわけがない。

ある個所に触れると、身体中に電気が走ったような感覚を覚える。

それが前立腺であると、さっき教えられた。

そこを叩かれると、ペニスを抜かれるよりも気持ちいい。

「千早……そこ……！！」

「ああ、前立腺、な？ 気持ちいいだろう？」

「ん……きもち、いい……」

自分でも信じられないほどの甘い声で答え、俺は尻を振る。

「ははは、そんなにいいんだ。早くここ拡げて、中にいれたらどんな声で啼くのかなあ、お前」

楽しそうに笑いながら、千早は俺の後孔を刺激し中を拡げていく。いったいどれほどの時間中を愛撫されていただろう。

「もう我慢できない」

切羽詰った声で言い、千早は俺の中から指を引き抜いた。

ああ、その時が来てしまう。

怖い、嬉しい、嫌だ……早く欲しい……？

いろんな感情が頭をよぎる中、千早は俺の腰を掴むと、俺の中に一気に侵入してきた。

「ああー！」

指なんかとは比べ物にならないほど太く、長いものが容赦なく狭い穴をこじ開けていく。

「あー、挿れただけでイクなんて、ほんと可愛いね、琳太郎、でも」

「あ、あ、あ……む、無理……」

「むりじゃないだろ、琳太郎。俺はまだ、イってない」

「ひっ……!!」

千早はどんどん俺の中に腰を進めていき、そして、抽挿を始めた。

「やっぱりまだ全部は無理か……ああ、楽しみだなあ、琳太郎。どれくらいで全部入るようになるかな」

奥まで入っているような気がするのに、まだ全部じゃない……？

そういえばネットで調べたとき書いてあったっけ？

アルファのベニスは通常の男性より長くて太いものが多いって。

「う、ああ……」

千早が動くたびに俺は声を漏らし、視界が白く染まる。

「中、気持ちいい。なあ、琳太郎。いっぱいやって、俺の形覚えるよ？」

「あ、ああ……い、いく、からあ……千早、そこ、だめえ！」

千早に何を言われているのかわけがわからなくなっている俺は、ひたすらに喘ぎ、与えられる快楽に酔いしれていた。

「いく、いく、いくからあ！」

俺はびくんびくん、と身体を震わせ、勢いよく射精する。

「ん……すっごい締め付け……俺も、出る」

余裕のない声で言い、千早は腰の動きを止めた。

ああ、いったんだ、千早も。

しばらく繋がったままだった後、千早は俺の中からゆっくりとベニスを引き出す。楔を失った俺は、そのままベッドに倒れこみ、呆然と壁を見つめた。

俺、本当に抱かれた。

千早に。

股間を下に敷いていたタオルでぬぐわれた後、千早の手が俺の頭を撫でる。

「卒業まで、楽しませろよ？ 偽物の番」

偽物の番。

その言葉は、俺の心にずしりと重くのしかかった。